

「政界胸算用」

遠き江戸での、賑やかなる話を聞かせていただき、永田町のことが目に見えるようでございます。

さてまた京大坂の噂では、そちらには、糞骨彩振の「渡り小姓」が、あるじの袈裟まといで、袖下広げで、五十両、五百両の納め振る舞い。

何事も、物に馴れば、物おじしなくなるのが世のならい。

上が鈍すれば、下は下で、この類の螭竜が、うごめく機を狙う。角の生えた猿とか、足が五本の中国産の鳴鳥とか、ほんに賑やかな年明け興行。

神様仏様でも、金儲けは黙ってではできぬ世の中、ましてや、下々の民草がまかり出での、畏れ少な的心得ちがい。

あるじも、また、その足元を狙う野盗の面々の「神前長久、国安寧、民安全、平和安心」と、連呼と大書するのも、己だけの暮らしの充実のためと、敵と味方の入り乱れ。

また、近頃は、わずかな身代だった者どもが、働きにより、五百貫目もの身代になり、目出度いことであるが、そこで待つのは、げに、恐ろしきお金の世界。

番頭や丁稚の不始末ゆえに困ったあるじに、「たとえ、千日千夜ご思案なさっても、もらったカネを返す工夫は、たったの一つしかありませぬ」と、進言口上する者あり。

さらに、「脇のかたさに手抜かりが？

さりとして、蒔かぬ種に草木の生えるわけでなし。

「お前さんのゆすり方はもう古い。
それでは当世風が承知しないじゃないか？」
でも、今さらに、何を言ってももう遅い。

ついに、騒いでなんぼの、
浮かれ稼業の「かわら版屋」の面々を、
多数集めての、「さよなら」興行と相成りぬ。

切れ者は成り上がるのも早いが、
成り下がるのは、なおさらに速い。